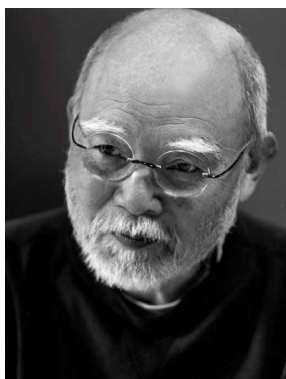


作家の肖像

第 20 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



平野甲賀

1938-2021

ひらの・こうが

1938年京城(現ソウル)生まれ。装丁家、ブックデザイナー。武蔵野美術学校(現武蔵野美術大学)視覚デザイン科卒業後、高島屋宣伝部を経て、フリー。64年から91年まで晶文社の本の装丁を一人で担い、同社のイメージを形成した。演劇との関わりも深く、劇団黒テントなどのポスター制作も続けた。2007年に描き文字フォント「コウガグロテスク 06」が発売。21年3月、82歳で死去。

空間に躍る文字

平野さんと初めてお会いしたのは2007年の冬、世田谷美術館である企画展が開かれたときです。その企画展は、土方久功と中島敦^{ひじかたひさかつ なかじまあつし}に関するものでしたが、ポスターの題字を平野さんにデザインしていただき、美術館にも足を運んでいただいたのです。それより前に拙著^(※1)の装丁を手がけてもらったこともあるのですが、実際にお会いするのはそのときが初めてでした。

がっちりとした体躯^{たいく}で、自己主張をあまりしない寡黙な方でした。それでいて朗らかで、人としての奥行きを感じたのを覚えています。そのご縁もあって、2019年の企画展「ある編集者のユートピア」でも、題字のデザインをお願いしました。

平野さんの手がける文字は平面ではなく、空間の中で躍っているように思えます。文字がもつ形や概念を一度上手に壊して、それから再構築していたのではないのでしょうか。

演劇への愛情

演劇への揺るぎない愛情をもっていらっしゃる方でもありました。「黒テント」をはじめとする劇団のポスターも多数手がけましたが、その劇団の内側にまで入り込んでいき、仕事をしたと聞きます。外側に身を置き、事務的に仕事をこなすのではなく、舞台装置や時には演出にまで関わった。ここに平野さんの創造者としての姿勢がうかがえます。

装丁はいわゆる本の顔。装丁が本文の内容とまったく離れてしまえば、本の顔にふさわしくない。かといって本文の内容に引きずられすぎても、

デザイナーの個性やコンセプトが置き去りになってしまう。そのあたりの調整がとても難しいところです。

窮屈さをも楽しみながら

デザインには、正解に近い存在があります。「1+1=2」というような世界共通の公式がある。文字デザインについていえば、大多数の人が読みやすいような文字にすると、どんな公式に近づいていってしまう。それはもう単なる普通の活字です。

その意味で、平野さんはデザインにおけるある種の窮屈さを感じていたかもしれません。しかし、そういった「正解」と接点をもちつつも、読めるか読めないかのギリギリのところで文字を造形した。窮屈さを認めたくて、まるで子どものように、数々の実験を楽しんでいたように思えるのです。

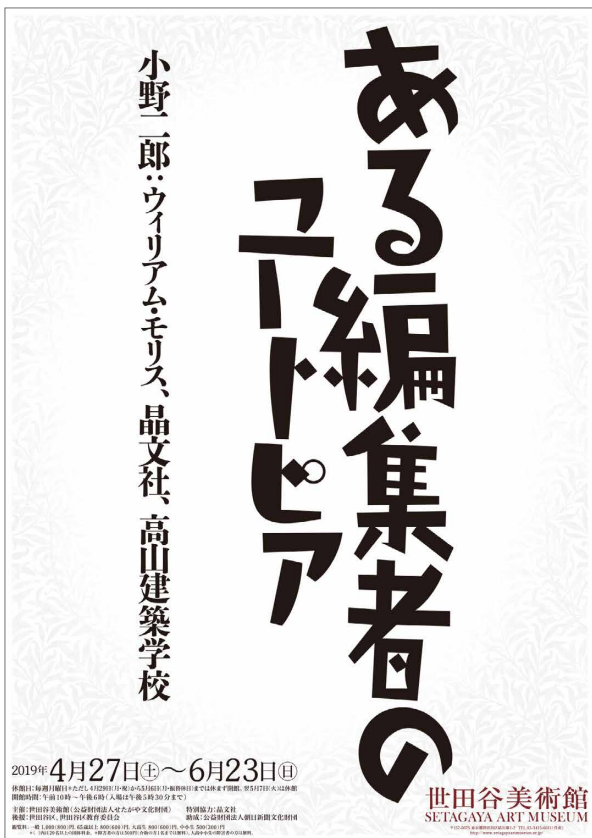
代名詞ともいえる描き文字フォント「コウガグロテスク」の発売で、誰でも平野さんの文字を扱えるようになりましたが、やはり同じフォントを使ってデザインしただけでは、平野さんのようにはいかない。字間や傾きなど、非常に微妙なところまで気を配って仕事をされていたことがよくわかります。文字デザイン、装丁の世界において、天才だったというほかありません。(談)

※1『開化の浮世絵師 清親』
(酒井忠康 著、1978年、せりか書房)

酒井 忠康

さかい・ただやす

世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



左上／『深夜特急』(沢木耕太郎 著)の装丁

1986 新潮社
作家の沢木耕太郎が、1970年代にインドのデリーからロンドンまでを乗り合いバスで旅したときのことを描いた紀行小説。平野は独特の描き文字で題字をデザインし、その後も沢木作品の装丁を数多く手がけた。

右上／『現代美術コテンパン』 (トム・ウルフ 著／高島平吾 訳)の装丁

1984 晶文社
黄色の背景に黒の題字という装丁が特徴の「晶文社セレクション」シリーズの1冊。サイのロゴマークも平野が自らデザインした。

下／企画展「ある編集者のユートピア」のポスター

72.8 × 51.5cm 2019
(文字:平野甲賀 デザイン:桑畑吉伸)
晶文社を設立した一人である編集者・小野二郎と、その周辺の活動を紹介した企画展。平野はポスターやちらしの文字デザインに加え、会場の展示にも関わった。